

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2022

課題番号：18H05726・19K20923

研究課題名（和文）就業ステータスに基づく主観的ウェルビーイング格差固定化メカニズムの解明

研究課題名（英文）An Exploration into how Inequality of Subjective Well-being is Entrenched Based on Employment Status Transitions in Japan

研究代表者

田中 陽平（Tanaka, Yohei）

東北大学・経済学研究科・博士研究員

研究者番号：30827895

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：人々の幸福感は、それぞれの人がどのような社会的属性を帯びると、どのような時間的推移をしていくのでしょうか。この研究では特に正規雇用・非正規雇用・失業という就業状況の変化に着目し、この問いに答えようと思いました。そして、日本国内で継続的に収集された個人に関するデータを分析したところ、非正規雇用で働くことよりも失業することのほうが、幸福感にとって長期的なダメージがあることがわかりました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ある一時点における人々の幸福感が、どのような属性とどのように関連しているかを明らかにしただけでは、幸福感について十分に理解できません。例えば、これまでの研究から結婚という出来事は幸福感を高めることが知られていますが、そのような出来事と結びついた幸福感の変動の多くは一時的なものです。これらに対する例外として、失業状態にある人は男女問わず持続的に幸福感が低い傾向にあることがイギリスやドイツの研究で明らかにされています。この研究では、日本でも海外と同じ傾向が当てはまることを明らかにしました。このことは日本において長期的失業の原因を特定する必要性や失業中の人々への様々なケアの不足を示唆しています。

研究成果の概要（英文）：How do people's happiness levels change over time after they have a certain social attribute? I aimed to address this issue in this study by focusing on transitions among three employment statuses: regular workers, irregular workers, and the unemployed. I analyzed panel data collected in Japan to achieve this research objective. The main conclusion of this study is that continuous exposure to being unemployed for years is much more harmful for one's happiness level than exposure to being employed as an irregular worker.

研究分野：労働経済学

キーワード：主観的ウェルビーイング 幸福感 パネルデータ 失業 非正規雇用 適応効果

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

- (1) 日本ではバブル経済崩壊後の1994年頃から雇用労働者全体に占める非正規雇用者の比率が男女ともに急速に上昇してきた。日本の非正規雇用者は正規雇用者に比べて賃金が低い、技能の習得機会が乏しいなど不利な点が指摘されている。また、既存研究では初職で非正規雇用だとその後の追加調査で現職も非正規雇用の傾向があったことが報告されている。このような非正規雇用の不利な側面とその就業ステータスが長期にわたって継続されることを併せ考えると、非正規雇用にある人たちの主観的ウェルビーイングは持続的に低い状態に置かれている可能性がある。
- (2) 主観的ウェルビーイングとは経験するポジティブ・ネガティブな感情、幸福感、生活満足度の程度についての個人評価を指す。主観的ウェルビーイングの程度は人間の生活を取り巻く様々な構成要素の帰結と考えられるため、人々の生活の質を包括的に代表しうる有望な指標である。したがって、個人の主観的ウェルビーイング規定要因を知ることは学術的に重要であるが、日本における非正規雇用者の主観的ウェルビーイング研究はまだ緒に就いたばかりといえる。

### 2. 研究の目的

- (1) 上記の学術的背景に基づき「非正規雇用者の主観的ウェルビーイングは他の就業ステータスの人に対してどの程度低いまま持続するのか。」という学術的問いを設定した。
- (2) そこで、本研究は正規雇用と失業のはざまに置かれた非正規雇用という就業ステータスに着目して、主観的ウェルビーイング格差の一つとしての幸福感格差の固定化メカニズムを解明することを目的としていた。
- (3) 海外の既存研究では失業の主観的ウェルビーイングに対する負の効果が持続すると知られている。一方で、非正規雇用者であることの主観的ウェルビーイングとの関連はまだ国際的にみてもよくわかっていない。そこで、申請者が日本の個票横断データを分析したところ、失業よりも非正規雇用のほうに負の関連が明確に認められた。この知見を受けてさらに本研究はパネルデータを用いることでこの関連がどの程度の期間持続するのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

- (1) 就業ステータスと主観的ウェルビーイングの関連についての理論・調査結果を含む国内外の文献を収集・調査する。
- (2) 日本におけるパネルデータをベイズアプローチにより分析し、非正規雇用であることと主観的ウェルビーイングとの長期的関連を推定・可視化する。
- (3) ベイズアプローチのデータ生成的特性を活かしてデータの最終年度よりも先の年度で就業ステータスに応じてどのように主観的ウェルビーイングの軌跡が変わるのか予測・可視化する。

### 4. 研究成果

- (1) まず、日本のパネルデータを用いて非正規雇用であり続けることの幸福感への持続的関連の測定を行った。その結果、男性非正規雇用者では初年度における幸福感が有意に低い傾向があったものの1年後には適応していた。一方、男性失業者では2年未満ではあまり変化がないものの、2年後から有意な低下傾向を示した。このことは、本研究着想の契機となった横断データにおける非正規雇用者の幸福感が有意に低く、失業者の幸福感には有意な傾向が見られなかったことと整合している。しかし、パネルデータで分析したことによって着想当初の予想に反した結果が得られたといえる。つまり、長期的に見た場合、個人の幸福感にとって望ましくないのは非正規雇用よりも失業だったということになる。
- (2) この結果を踏まえて、非正規雇用や失業者といった特定の就業ステータスの持続やそれらの就業ステータス間での移動と幸福感との関連について(パネルデータにおける最終年以降の)シミュレーションデータを発生させることで将来予測を行った。その結果、男女ともに正規

雇用者から失業者に移行した場合、長期的な幸福感の低下が持続する一方で、失業者から正規雇用者や非正規雇用者に移行する場合、幸福感の増進が見られた。幸福感の増進は、失業者から正規雇用者への移行では幸福感レベルの不連続な飛躍として観察されたのに対し、失業者から非正規雇用者への移行では緩やかな増進として観察された。

- (3) したがって、非正規雇用よりも失業の方が長期的に見たとき個人の幸福感にとって深刻な低下がみられること、失業から就業への移行は幸福感を増進させるが、非正規雇用への就業より正規雇用への就業の方が幸福感の増進が早いことが本研究の主要な知見となる。
- (4) これらの知見は、例えば、非正規雇用がそれ自体として個人の幸福感にとって望ましくないというより、失業という幸福感にとって望ましくない状態に接近させる経路として機能していることを考慮する必要性を示唆していると考えられる。その意味において、失業リスクを正規雇用者・非正規雇用者間や非正規雇用内の各雇用形態間で評価することが今後の研究では重要になるだろう。
- (5) また、失業状態にある人は男女問わず持続的に幸福感が低い傾向にあることがイギリスやドイツの研究で明らかにされていることとの比較において、本研究は、日本でもこれらの国々と同じ傾向が当てはまることを明らかにした。そして、このことは日本において長期的失業の原因を特定する必要性や失業中の人々への様々なケアの不足を示唆しており、今後の研究課題としていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田中 陽平
2. 発表標題 主観的ウェルビーイングの適応不全を探る -日本における職業ステータス移行-
3. 学会等名 社会イノベーション・シンポジウム
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 田中 陽平
2. 発表標題 主観的ウェルビーイングの適応不全を探る -日本における職業ステータス移行-
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 田中 陽平
2. 発表標題 How does Subjective Well-Being Change over Years Across Different Occupational Statuses in Japan?: Panel Data Analysis in a Bayesian Approach
3. 学会等名 統計関連学会連合大会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Tanaka Yohei
2. 発表標題 Subjective Well-being for NPO Marketing and Evaluation in Japan
3. 学会等名 The 47th Annual ARNOVA Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------